Ⅴ．次の故事、ことわざの意味を説明しなさい。

一．阿吽の呼吸
　二人以上で一つのことをするときに、気持がぴったり合っている様子をいうことば。

二．青菜に塩
　新鮮な野菜に塩をふりかけるとしおれてしまうように、元気のよかった者が急にしょんぼりすることのたとえ。

三．青は藍より出でて藍より青し
　弟子が先生よりも優れていることのたとえ。

四．悪事千里を走る
　悪いことをすると、それがたちまち噂になって千里の遠方まで知れわたるという意味。

五．悪銭身につかず
　不正な方法で得たお金は、つまらないことに使ってしまって、たちまちなくなってしまう。

六．朝起きは三文の徳
　早起きをすれば、何かの得があるということで、早起きをすすめることば。

七．明日ありと思う心の仇桜
　今日は美しく咲き誇っている桜だが、明日もまた見られるだろうと思っていても、その夜のうちに強い風を受けて散ってしまうかもしれないということ。未来の不確実さ、人生の無常を説いたことば。

八．羹に懲りて膾を吹く
　熱い吸い物にうっかり口をつけて懲りたために冷たい膾まで吹いて食べるということで、前の失敗によって無益な用心をするたとえ。

九．後足で砂をかける
　世話になった人の恩を忘れるばかりか、去りぎわにさらに迷惑をかける。

一〇．後は野となれ山となれ
　当面している事態さえ切り抜けられるなら、将来それがどんな結果になろうと構わないという態度のこと。

一一．痘痕も靨

好意を覚える人の欠点や短所が、逆に美点や長所に見えるという意味。

一二．虻蜂取らず

二つの物を得ようと欲張って、結局どちらも得られないことのたとえ。

一三．油に水

たがいにとけあわず、しっくりしないこと。

一四．雨垂れ石をうがつ

少しずつの力でも、根気よくやれば成功する。

一五．雨降って地固まる

雨が降った後は地面が堅く締まるのと同様に、もめごとが起きたあとで、かえって物事が円満に納まること。

一六．蟻の穴から堤の崩れ

頑丈に築いた堤防も、小さな蟻の穴が原因となって崩壊することがある。わずかな油断や手違いによって重大な物事が駄目になることのたとえ。

一七．案ずるより生むが易し

出産が近づいた妊婦はあれこれと心配するが、実際はそれほど困難なものではなくて簡単に済むことが多い。はかの物事も似たようなもので、取り越し苦労をするには及ばないことをいったもの。

一八．言うは易く行うは難し

口で言うのは誰にでもできるが、実行するのは難しい。

一九．生き馬の目を抜く

生きている馬の目でさえ抜き取ってしまうという意味から、無法にも他人を出し抜いて素早く利を得ること。また、油断もすきもならないたとえ。

二〇．石が流れて木の葉が沈む

重い石が水に流れて軽い木の葉が水に沈むように、物事が逆になること。

二一．石に漱ぎ、流れに枕す

間違いを強いて押し通すこと。負け惜しみの強いこと。

二二．石に立つ矢

一心をこめて物事にあたれば、どんなことでもできるということ。

二三．石の上にも三年
冷たい石の上であっても、三年も座り続けていれば暖まってくるという意味で、どんなに辛いことがあっても耐え忍んでいれば報いられるというたとえ。

二四．石橋を叩いて渡る
石でできた丈夫な橋を渡るときでも、渡る前に叩いて安全を確かめるように、念には念を入れて用心するということ。

二五．医者の不養生
医者は他人には養生の大切さを説くが、自分は案外不養生だという意味で、立派なことを言いながら実行が伴わないたとえ。

二六．衣食足りて礼節を知る
人間は着る物や食う物に不自由しなくなって生活に余裕が生じると、自然に礼儀や節度をわきまえるようになるという意味。

二七．一日千秋の思い
一日が千年のように長く感じられるということで、待ち遠しい気持ちをいう。

二八．一日の長
一日だけ先に生まれたということで、少し年上であること。経験や技能などが、一段とすぐれていること。

二九．一を聞いて十を知る
優秀な人間は、少し聞いただけで全体が分るというたとえ。

三〇．一寸の光陰軽んずべからず
少しの時間でも、無駄に過ごしてはならない。寸暇を惜しんで、勉学に励めということ。

三一．一寸の虫にも五分の魂
生き物である限りどんな弱小であっても、それ相当の意地や根性があるから決して軽蔑してはならないという戒め。

三二．井の中の蛙大海を知らず
井戸の中の狭い世界に住んでいる蛙は広大な海というものを知らないという意味で、自分の狭い知識や経験にとらわれて、広い世界が他にあることを知らない人の場合をいう。

三三．入るを量りて出ずるを為す
収入をよく計算して、それに応じた支出をするということ。

三四．鰯の頭も信心から
第三者の目からはつまらない物でも、信仰が関係してくるとありがたく思われるということ。

三五．魚心あれば水心
こちらが好意を示せば、相手も好意をもつだろうということ。

三六．烏合の衆
からすの集まりのように、たださわぐだけで、規律も統一もない群衆のこと。

三七．雨後の筍
雨の降った後にたけのこがにょきにょき生えるように、続いて多く発生することのたとえにいう。

三八．牛に引かれて善光寺詣り
人につれられて、思いがけなく行くことのたとえ。あまり気がすすまないままに、人と一緒に行動することにもいう。

三九．氏より育ち
家柄や血統といったものより、環境や育てられ方のほうが人間形成に深く関係するということ。

四〇．鵜の真似する烏
鵜のまねをして魚をとろうとする烏はおぼれるということから、自分の力を考えないで人の真似をする者は失敗することのたとえ。

四一．独活の大木
体は人並み外れて大きいが、取り得がなくて役に立たない人間のたとえ。

四二．馬の耳に念仏
少しも感じないこと。一向にありがたく感じないこと。

四三．絵に描いた餅
絵の餅は、どんなに本物に似ていておいしそうであっても食べられない。頭の中で考えただけで実現する可能性のない計画、あるいは空想などのたとえ。

四四．海老で鯛を釣る
少しのえさで大きなえものをとらえること。

四五．縁の下の力持ち
他人のために、見えないところで努力すること。

四六．大風呂敷を広げる
実際にはできないような、大きなほらをふくことをいう。

四七．陸に上がった河童
河童は水の中では思う存分活動できるが、陸上では無力だとされる。そこから環境が変わったり、得手とする仕事などから離れたりして能力が発揮できなくなった人のたとえ。

四八．屋上、屋を架す
屋根の上にさらに屋根を架けるという意味で、無駄なことをすることのたとえ。

四九．奥歯に物がはさまる
すっかり心が打ち解けないで、なんとなく心にへだたりが感じられること。

五〇．驕る平家は久しからず
おごりを極める者は、長く栄えることなく亡びる。

五一．鬼の霍乱
鬼のように丈夫で、ふだんは病気に縁のない人が珍しく病気にかかること。

五二．帯に短し襷に長し
帯には短くて使えないし、といって襷には長すぎて邪魔になる。そこから、中途半端で役に立たないもののたとえ。

五三．溺るる者は藁をも掴む
困ったときには、頼みにならない物にも頼る。

五四．思い立ったが吉日
何かをやろうと思い立ったら、すぐ始めるとよい。

五五．親の意見と茄子の花は千に一つも仇はない
茄子の花は、必ずといっていいほど実になる。それと同じで、親が子にする意見には無駄がないので、よく聞くべきだということ。

五六．親の光は七光り
親の威光の大きいこと。子は、親の威光によって世間からいろいろな恩恵を受ける。

五七．飼い犬に手を噛まれる
なついていたはずの飼い犬から手を噛まれるという意味。信じていた部下や目を掛けていた者に裏切られ、恩を仇で返されることのたとえ。

五八．隗より始めよ
何事も手近なところから手をつけるべきだということ。また、まず言い出した人が実行すべきだということ。

五九．蛙の面に水
どんなしうちに会わされてもいっこうに平気で、少しも感じないことのたとえ。

六〇．稼ぐに追い付く貧乏なし
いつも精出して一生懸命働いていれば貧しい生活で苦しむことはないという意味。

六一．頭が動かねば尾が動かぬ
人の上に立つ者が先頭に立って活動しないと、下の者は働かないこと。

六二．刀折れ矢尽きる
力がつきて、戦う方法がなくなることのたとえ。

六三．火中の栗を拾う
他人のために、あえて危険を冒すことのたとえ。自分の利益にもならないのに、もめごとに頭をつっこんだりすること。

六四．勝って甲の緒を締めよ
戦いに勝っても油断してはいけない。成功しても心を許さないで、用心深く事を進めよ。

六五．河童の川流れ
泳ぎの達者な河童も、時には川の水に押し流される。名人上手であっても失敗することがあるという意味。

六六．瓜田に履を納れず
瓜畑で脱げた靴を履こうとかがめば瓜を盗んでいるかと疑われる。疑いを招く行為は慎めという戒め。

六七．蟹の横這い
蟹が横に歩く歩き方のことで、はたから見れば不自由なようであるが、本人にはそのほうが楽であることのたとえ。

六八．禍福は糾える縄の如し
災厄と幸運とは縒り合わせた縄のように表裏一体をなしていて、代わる代わるやってくるものだということ。

六九．果報は寝て待て
人間の運は、人の力ではどうにもならないものであるから、あせらずに時機を待つがよい。

七〇．亀の甲より年の功
年をとった人の経験は貴いものだということ。

七一．鴨がねぎを背負ってくる
鴨の肉にネギまでついて、すぐにカモなべが食えるというように、うまいことが重なって、好都合なこと。

七二．痒い所に手の届く
細かいところにまで気がついて行き届くのをいう。

七三．烏の行水
入浴がとても速くて、あっさりとしていること。

七四．借りて来た猫
おとなしすぎて、口をきかないこと。

七五．枯れ木も山の賑わい
枯れ木も、山の風情をそえるのに役立つ。つまらないものでも、無いよりはましだということ。

七六．可愛い子には旅をさせよ
愛する子には、旅のつらい思いを経験させて、世の中のほんとうのことを知らせることが、最もよい教育である。

七七．可愛さ余って憎さ百倍
かわいいと思う心が強かっただけに、いったん憎いとなったら、その憎しみの心はひととおりではない。

七八．川向かいの火事
自分には直接何の関係もない災害のたとえ。

七九．考える葦
人間のこと。

八〇．肝胆相照らす
互いに真心を打ち明けて理解し合い、親しく交わること。

八一．艱難汝を玉にす
困難や苦労を重ねることによってこそ、人間は大成されるという意味。

八二．聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥
知らぬことを人に聞くのは恥ずかしいにしても、その場限りですむ。しかし、聞かないでいれば、知らないために一生恥ずかしい思いをすることになる。知らないことは、積極的に質問せよという意味。

八三．雉も鳴かずば撃たれまい
雉も鳴かなければ居場所が知られずに鉄砲に撃たれずにすんだろうということで、言わなくてもよいことを言ったために災難を受けるたとえ。

八四．机上の空論
頭の中だけで考えた、実際の役には立たない理論や計画、意見のこと。

八五．気違いに刃物
何をしでかすかわからない。非常に危険なことのたとえ。

八六．木で鼻をくくる
ひどく無愛想で、冷淡な態度を示すこと。

八七．木に竹をつぐ
木に竹を接ぐというようなことはできないことであるから、不調和なものを無理に結びつけること、前後のつり合いが悪いこと。

八八．九死に一生を得る
九分どおり助からない命を、かろうじて助かること。

八九．窮鼠却って猫を噛む
追い詰められた鼠は猫にさえ噛みつく。絶体絶命の立場に立たされると、弱いものでも強い相手に反撃して勝つということ。

九〇．清水の舞台から飛び下りる
清水寺は本堂の前の懸崖に舞台を張り出しているが、そこから飛び下りる思いで非常な決意をするということ。思い切った高額の買物や成否の不明な決断をするときに使う。

九一．漁夫の利
互いに利益を争ってるうちに、第三者にまんまと利益を横取りされてしまうこと。

九二．木を見て森を見ず
一部分を見て全体を忘れることのたとえ。部分にこだわって、全体を見失うこと。

九三．金時の火事見舞い
顔の赤い金時が火事見舞いに行けば熱気でさらに赤くなることから、酒に酔って真っ赤になったことのたとえ。

九四．苦あれば楽あり楽あれば苦あり
苦労をすれば楽がまわってき、楽をすれば苦労がまわってくるということで、人の世の中は、苦も楽もかべ一重の違いである。

九五．臭い物に蓋
臭い物に蓋をして、匂いが出ないように一時凌ぎをするように、悪いことやみっともないことが他に知れないように、一時おさえるための手をうつことのたとえ。

九六．腐っても鯛
もともとよい物は、たとえいたんでも、それだけの値打ちがあることのたとえ。

九七．口は禍の門
何気なく言ったことから災難が身に振りかかる例が多いので言葉を謹めということ。

九八．国破れて山河在り
戦乱が続いて国家は元の姿を失ってしまったが、自然の山河だけは依然として昔のままに残っているという意味。

九九．蜘蛛の子を散らすよう
蜘蛛の子の入った袋が破れると小さな蜘蛛がさっと四方に散ってゆくが、大勢の人が一度に逃げ出すのをそれにたとえたことば。

一〇〇．暗がりから牛
黒い牛が暗がりからのっそりと出てきても形がはっきりしない。そこから、物事がはっきりせず、区別のつきにくいことのたとえ。また、ぐずぐずしていて、はきはきしないことのたとえ。

一〇一．苦しいときの神頼み
普段は神を拝まない者が、困ったときや災難にあった時には、神や仏に祈って助けをかりようとすること。

一〇二．車の両輪（りょうりん）
二つのうち、どちらか一方も、取り去ることのできないような密接な関係にあることのたとえ。

一〇三．来る者は拒まず、去るものは追わず
自分の所に来たいというものは誰でも受け入れて拒絶しないで、自分の許から去って行こうとする者は決して引き止めないということ。

一〇四．君子（くんし）危うきに近寄らず
教養や徳を備えた人格者である君子は、思慮深いので危険に不用意に近づいて災難を招いたりしないものだという意味。

一〇五．君子は豹変（ひょうへん）す
教養があって徳の高い人は、自分が過ちを犯したと知った時は、即座にはっきりと改めるということ。現在は態度を急変する意味にも使われる。

一〇六．鶏口（けいこう）と為（な）るも牛後（ぎゅうご）と為る勿（なか）れ
小さな組織の長になって支配するほうが、大きな組織の末端で支配されるよりましだということ。

一〇七．芸は身を助ける
何かの芸を身につけておくと、万一の場合にそれが生計を立てるのに役立つことがあるという意味。

一〇八．怪我の功名
やり損ないが、かえって手柄になること。また、何気なくやったことで思いがけなく手柄を立てること。

一〇九．下駄（げた）を預ける
うまく処理してくれと、無理を承知でおしつけ、まかせたような形をとること。

一一〇．犬猿の仲
犬と猿とは仲が悪いということから、仲の悪い間柄。

一一一．けんか両成敗
けんかをした者は、どちらが良くて、どちらが悪いときでも、両方に罪があるとして、両方をばっすること。

一一二．健全なる精神は健全なる身体に宿る
からだが健康なら、自然に精神も健全になるものである。からだの不健康な者に、健全な精神の持ち主はない。

一一三．光陰矢の如し
飛び立った矢のように月日は素早く去って行って戻らないということ。

一一四．後悔先に立たず
事が終わってから悔やむのが人の常だが、いくら後悔してみても取り返しがつかないということ。

一一五．好事魔多し
良いこと、あるいはうまく運びそうなことには、とかく邪魔が入りやすいという意味。

一一六．好事門を出でず悪事千里を走る
善行についての評判は、とかく世間に伝わらないものであるが、悪い評判はたちまち遠方までひろがるということ。

一一七．郷に入っては郷に従う
人は住んでいる土地の風俗や習慣に従った生活をするのが、上手に世間を渡るやり方であるということ。

一一八．弘法にも筆の誤り
名筆家の代表とされる弘法大師でも、時には書き誤りがあるということで、名人上手でも失敗するたとえ。

一一九．弘法は筆を択ばず
書の名人であった弘法大師は、どんな悪い筆を用いても立派な字を書いたということで、物事に巧みな人は道具などに文句をつけないというたとえ。

一二〇．紺屋の白袴
人の物を紺に染める紺屋が、自分の袴を染めるひまがなく、白い袴のままではくということから、他人のためにばかり忙しくて、自分のことをかまうひまがないたとえ。

一二一．氷は水より出でて水より寒し
弟子が先生より勝ることのたとえ。

一二二．故郷に錦を飾る
故郷を離れていた人が立身出世をして、立派な衣服を着、晴れがましい思いで帰郷すること。

一二三．虎穴（こけつ）に入らずんば虎子（こじ）を得ず
虎の子を捕らえるには虎のいる洞穴に入らなければならないように、危険を冒さなければ大きな利益や成功は得られないということ。

一二四．五十歩百歩
五十歩逃げた者と百歩逃げた者とでは逃げたという意味では同じということから、少しの違いはあっても、本質的には同じことをいう。

一二五．転ばぬ先の杖（つえ）
つまづいて転ばぬように、前もって杖を突いて歩くということからあらかじめ失敗を防ぐための準備をしたり、用心したりしておくべきだというたとえ。

一二六．子を持って知る親の恩
自分が親になって、はじめて親の心遣いのありがたさがわかる。

一二七．塞翁（さいおう）が馬
人生では何が幸せになるか、何が不幸せになるかわからないというたとえ。

一二八．歳月（さいげつ）人を待たず
年月は人の都合などに関係なく、どんどん過ぎ去っていき、少しも待ってくれない。だから、今という時を大切にして勉強せよということ。

一二九．竿竹（さおだけ）で星を打つ
竹のさおで星をたたきおとすということで、不可能なことをやろうとするおろかさをいう。

一三〇．酒屋へ三里豆腐屋へ二里
酒屋へ行くのに三里、豆腐屋へ行くのに二里も距離があるという意味で、田舎の不便な土地のたとえ。

一三一．先んずれば人を制す
人より先にやれば、相手を抑えることができるから、有利である。

一三二．酒は百薬の長
適度に飲むならば、酒はどんな薬よりも健康を保つ効き目があるということ。

一三三．雑魚の魚交じり
つまらぬ小魚が大きな魚の仲間に入っているということで、力、能力、地位などで取るに足らぬ小物が大物の中に交じっているたとえ。

一三四．さじを投げる
医者が、病人を治す見込みがなくなって、薬を調合するさじを投げ出すということで、物事の成功する見込みが無く、あきらめることをいう。

一三五．砂上の楼閣
砂の上に建てられた高い建物は容易に倒壊するところから、基礎がしっかりしていなくてすぐに崩れてしまいそうなもののたとえ。また、実現が不可能なことのたとえ。

一三六．猿も木から落ちる
木登りの得意な猿でも時には木から落ちることがあるというわけで、その道に長じた名人でも時には失敗するというたとえ。

一三七．去る者は日々に疎し
死んだ者は日がたつにつれて人々から忘れられていくということ。また、親しかった者も遠く離れると疎遠になるという意味。

一三八．触らぬ神に祟りなし
何事も、かかわり合いを持たなければ、わざわいを受けることはないということ。

一三九．三顧の礼
仕事を引き受けて欲しい時、またはある地位について欲しい時に、相手の人を何度も訪問したりして礼をつくして頼むこと。

一四〇．三十六計逃げるに如かず
兵法には三十六種の計略があるが、それよりも不利な時には逃げ出すのが最良の策だということ。

一四一．山椒（さんしょう）は小粒でもぴりりと辛い
山椒の実は小さくて辛い。そこから、体が小さくても激しい気性を持ち、能力的にも優れていて侮りがたい人間のたとえ。

一四二．三人寄れば文殊（もんじゅ）の知恵
一人では平凡な考えしか浮かばなくても、三人がいっしょになって相談すれば文殊菩薩ほどの知恵が出てくるということ。

一四三．四角な座敷を丸く掃（は）く
四隅の塵や埃はかまわずに座敷の真ん中だけを丸く掃くように、細かな所は手抜きをして、いいかげんな仕事をすること。横着をきめこんだ、ごまかし仕事。

一四四．地獄で仏
鬼ばかりがいる恐ろしい地獄で苦しめられているときに、情深い仏様にたまたま出会って助けてもらったようだということで非常な困難や危難に対して思いがけない助けを得て喜ぶたとえ。

一四五．地獄の沙汰（さた）も金次第
罪人を厳しく裁く地獄の裁判でも金を出せば手加減してもらえるということで、金の力は万能であるというたとえ。

一四六．獅子身中（ししんちゅう）の虫
獅子の体に寄生して害を与える虫のこと。仏教徒でありながら仏法にあだなす行為をする者のたとえ。さらに、組織などの内部にいて、その組織に災いを起こす者をいう。

一四七．事実は小説よりも奇（き）なり
この世に起こる出来事は、作り話の小説よりももっと不思議なめぐり合わせや複雑な変化に富んでいる。

一四八．釈迦（しゃか）に説法孔子に悟道（ごどう）
釈迦に仏法を説いたり、孔子に道徳を説いたりすることで、よく知らないことを優れた専門家に教える愚かさのたとえ。

一四九．蛇（じゃ）の道は蛇（へび）
大蛇の通り道は普通の蛇にもわかるという意味で、同類の者のすることは同類の者によくわかるたとえ。さらにその道の専門家はその道のことに詳しいたとえ。

一五〇．重箱の隅を楊子でほじくる
どうでもよいようなつまらない事までほじくり出して、こまごまと口出しすること。

一五一．朱に交われば赤くなる
朱の中に入れた物が赤くなることから、人は交わる友によって善にも悪にも感化されるというたとえ。

一五二．春秋に富む
歳月を豊富に持っているということで、年が若く、将来があることをいう。

一五三．小異を捨てて大同につく
意見の違いが多少あることは無視して、大勢が支持する大局的な意見に従うこと。

一五四．上手の手から水が漏る
どんな上手な人でも、失敗することがあるということのたとえ。上手な人がたまたま失敗した時などにいう。

一五五．小の虫を殺して大の虫を活かす
一部分を犠牲にして、全体を生かすことのたとえ。

一五六．焦眉の急
眉毛が焦げるほど火が近づいているということで、事態がきわめて急迫していることのたとえ。

一五七．少年老い易く学成り難し
月日のたつのは早く、年若い者もすぐに年をとってしまうが学問のほうは成就しにくい。若いうちに時間を無駄にしないで勉強すべきことをいう。

一五八．将を射んとせば先ず馬を射よ
敵将を討ち取ろうと思ったら、まずその敵将の乗っている馬を射倒せということで、目標に直接ぶつからずに周囲から攻略するほうが効果的だという意味。

一五九．知らぬが仏
知ると腹も立つけれども、知らなければ、そのまま平気でいられるということ。

一六〇．白羽の矢が立つ
大勢の中から、よい目的であっても、悪い目的であっても、特に選び出されること。

一六一．人口に膾炙（かいしゃ）す
おいしい料理が万人に好まれるように、広く世間の話題になりもてはやされること。

一六二．人事（じんじ）を尽くして天命（てんめい）を待つ
全力を出し尽くしてやれるだけのことはやったのだから、結果がどうあろうと天の意志にまかせるしかないという心境をいったもの。

一六三．死んだ子の年を数える
あの子が今生きていればいくつになっているのにと年を数えること。かえらない過去のぐちをいうこと。

一六四．心頭（しんとう）を滅却（めっきゃく）すれば火も亦（また）涼し
何事も心にとめないような無念無想の境地にあれば、火でも涼しく感じられるということで、心の持ち方で苦痛も覚えないという意味。

一六五．水魚（すいぎょ）の交わり
水と魚は切っても切れない関係にあるように、きわめて親密な友情や交際のたとえ。

一六六．水泡（すいほう）に帰す
あっけなく消え失せてしまう水の泡のようになるという意味で、それまでの努力や苦労がすべて無駄になることのたとえ。

一六七．末は野となれ山となれ
あとはどうなってもかまわない、どうにでもなれということ。

一六八．好きこそものの上手なれ
好きでやることは、上達しやすい。

一六九．過ぎたるは猶（なお）及ばざるが如し
何事においても度を過ぎたことはよくないことで、少し足りないのと同じようなものだという意味。過不足のない中庸がよいということ。

一七〇．雀（すずめ）百まで踊り忘れぬ
雀は死ぬまで飛び跳ねるくせがぬけないということから、人間も幼い時代の習慣は改まりにくいものであるということ。年をとっても道楽のくせが直らないのに多く使う。

一七一．捨てる神あれば拾う神あり
自分を見捨てる神がある一方で、助けてくれる神もある。同じように、世間でも自分を相手にしない人がいるかと思うと、面倒を見てくれる人もいる。くよくよしなくてもいいということ。

一七二．寸鉄人を刺す
短く要を得た言葉で、人の急所をつく。

一七三．精神一到何事か成らざん
精神を集中させれば、どんな事でもできないものはない、という意味。

一七四．清濁併せて呑む
清い流れも濁った流れも同じように呑み込む大海のように、善人であろうと悪人であろうと分け隔てなく受け入れること。包容力があることのたとえ。

一七五．青天の霹靂
青く晴れ渡った空に不意に起こった雷鳴のことで、思いがけない突発的な事件、衝撃的な出来事のたとえ。

一七六．狭き門より入れ
楽な方法をとるより、難しく苦しい方法をとるほうが、立派な人間になれる。

一七七．船頭多くして船山へ上る
船頭が多くいて、それぞれがまちまちな指図をすると、船が山へ上るようなとんでもないことが起こりかねない。指図する者が何人もいて方針の統一がとれず、物事がうまく進行しないたとえ。

一七八．千万人と雖も吾往かん
自分の考えや行動が正しいと確信したら、敵が千万人いたとしても恐れずに立ち向かっていこうという意味。

一七九．前門の虎後門の狼
表門で虎を防いだが、裏門にはすでに狼がまわっていることで、やっと一つのわざわいを逃れたと思ったらまた新しいわざわいにあうこと。

一八〇．糟糠の妻
貧しく粗末な食事しかとれないころから苦労を共にしてきた妻。

一八一．袖振り合うも他生の縁
路上で見知らぬ人と袖を触れ合わせるのも前世からの因縁であり、ささいな出来事もすべて偶然ではないということ。

一八二．備え有れば憂い無し
いつも準備を怠らない者は、もし万一の事が起こっても、少しも心配することはない。

一八三．太鼓判を捺す
太鼓ほどもある判を捺して保証するということ。絶対に間違いのないことを保証するたとえ。

一八四．対岸の火災
向こう岸の火事は、こちらに燃えてくる心配がなく安心していられるということで、自分にとっては痛くも痒くも感じないこと。

一八五．大山鳴動して鼠一匹
噴火でもするように大きな山が鳴り動いたのに、鼠が一匹出て来ただけだったという意味で、大騒ぎしたわりには実際の結果が小さいことのたとえ。

一八六．高嶺の花
高い山の頂上に咲いている美しい花は、いくら欲しくても手に入れることができない。遠くからあこがれているだけで、自分の力では得られないもののたとえ。

一八七．多芸は無芸
いろいろなことができる人は、これが専門といえるような特に優れた面が一つもないこと。

一八八．他山の石
他の山の粗悪な石でも自分が所有する玉を磨くのに利用できるということで、直接関係のない人の言動が自分にとっての戒めになるという意味。

一八九．多勢に無勢
少人数では、大人数に立ち向かっても、結局は負けてしまうこと。

一九〇．たたけばほこりが出る
どんな人でも、探し出せば欠点や弱点が出てくるものである。

一九一．畳の上のけが
最も安全な場所と思われる畳の上でもけがをすることがあるということから、けがはどこでするかわからないということ。

一九二．立つ鳥、跡を濁さず
水鳥は飛び立っても水を濁さないということから、人も立ち去るときはきちんと後始末をしておくべきだということ。

一九三．立て板に水
立てかけてある板に水をかけて流すように、流れによどみがなく、すらすらと口がうまいことのたとえ。

一九四．蓼食う虫も好き好き
辛い蓼を好んで食べる虫があるように、人の好みはさまざまであるということ。

一九五．伊達の薄着
おしゃれな人は着ぶくれして不格好になるのを嫌い、寒い冬の日でも薄着でとおすということ。

一九六．棚からぼた餅
棚の下でのんびり寝ていたらたまたまぼた餅が落ちてくるということから、思いがけない幸運が舞い込んでくることのたとえ。

一九七．掌を返す
てのひらをくるりと裏返すことで、物事が容易にできることのたとえ。また、人の心や態度が急変することのたとえ。

一九八．玉磨かざれば光なし
玉は原石を磨きあげることによって、はじめて宝器となる。人も素質や才能があるだけでは駄目で、学問や修養で自己錬磨しなければ有用な人物にはなれないというたとえ。

一九九．竹馬の友
幼いころ、竹馬に乗って遊んだ仲のよい友人のこと。幼なじみ。

二〇〇．塵も積もれば山となる
少しのものでも、つもりつもれば大きなものになるから、小さなことだといっておろそかにしてはいけないことのたとえ。

二〇一．月に叢雲花に風
せっかくの名月は群がる雲に隠され、桜の花が満開になれば風が散らす。よいことにはじゃまが入りやすく、思うようにいかないものだというたとえ。

二〇二．角を矯めて牛を殺す
少しの欠点を直そうとして、かえって全体をだめにしてしまうこと。

二〇三．罪を憎んで人を憎まず
犯した罪は許すべきではなく罪として憎まなくてはならないが、罪を犯した人間そのものを憎んではいけないということ。

二〇四．爪に火を点す
ひどくけちなこと。倹約して、質素な生活を送ること。

二〇五．爪の垢を煎じて飲む
特別に優れた人に、少しでもあやかろうとつとめること。

二〇六．鶴の一声
小さな鳥が群がって鳴き騒ぐよりも、鶴が一声鳴くほうが威厳があって優れているという意味で、大勢で議論してまとまらなかったことが実力者の一言で決まることのたとえ。

二〇七．敵に塩を送る
何かで敵対関係にある相手が別のことで苦しんでいる場合、その弱点につけこまずにかえって援助すること。

二〇八．敵は本能寺にあり
行動を起こすときに本当の目的は表面に掲げたものではなく、別にあるということ。

二〇九．鉄は熱いうちに打て
硬い鉄も熱して柔らかい状態の時はいろいろな形に作り上げることができる。そこから、人も若いうちに鍛錬すべきだというたとえ。

二一〇．出る杭は打たれる
頭角をあらわす者は、ほかから憎まれたり妨げられること。出過ぎたふるまいをする者は嫌われて、制裁を受けること。

二一一．天井から目薬
まわりくどいことのたとえ。または、ききめのないたとえ。

二一二．天に唾す
天に向かって唾を吐くと、それが自分の顔にかかってくるということから、他人に危害や損害を与えようとして、かえって自分がひどい目にあうたとえ。

二一三．天は自ら助くる者を助く
天、あるいは神は、他人の助力を頼みとせず、自分自身で努力する者に力を貸してくれるということ。

二一四．頭角を見す
人々の中で頭の先が高く抜き出て目立つという意味から、才能や学識が群を抜いて優れること。

二一五．灯台下暗し
周囲を明るく照らす燭台も、そのすぐ下は陰になり暗いということ。身近なことには案外気づかないでいることのたとえ。

二一六．豆腐に鎹
柔らかな豆腐に鎹を打ち込んでも崩れてしまってどうしようもないことから、意見をしてもまったく手答えがなく、効き目がないたとえ。

二一七．時は金なり
時間は非常に貴重で、金銭と同じようなものだということ。時間を無駄使いするなという戒め。

二一八．読書百遍義自ら見る
難しいと思われる書物でも、何度も繰り返して読めば内容が自然に理解できるということ。

二一九．得を取るより名を取れ
金を儲けるといったような実利よりも名誉や名声のほうを重視すべきだという考え。

二二〇．毒を以て毒を制す
毒にあたった病人の治療に毒薬を用いるということ。悪人を除くのに別の悪人を利用するたとえ。

二二一．床の間の置物
地位だけは高くて、それにふさわしい実権のないこと。

二二二．年寄りの冷水
老人が、年に似合わず元気の良いことで、老人が無理をするのをひやかしたり、いましめたりするときにいう。

二二三．鳶が鷹を生む
平凡な親がすぐれた子供を生むたとえ。

二二四．鳶に油揚をさらわれる
自分が手に入れようとしている物を、突然横から取られることで、意外なことに呆然とすること。うっかりしていて馬鹿をみること。

二二五．捕らぬ狸の皮算用
まだ手に入らないうちから期待をかけて、計画を立てること。

二二六．虎の威を借る狐
自分は弱いのに、強者の権勢をかさにきて威張ること。

二二七．虎の尾を踏む
強暴な虎の尾を踏めば、怒った虎にかみ殺されてしまう。そこから、非常に危険なこと、無謀なことをするたとえ。

二二八．虎は千里行って千里帰る
虎は一日に千里も行って、またその千里を戻って来る。勢いの盛んなことのたとえ。さらに、子を思って帰るという意味から、親の子に対する情愛の深さをたとえる。

二二九．団栗の背競べ
団栗はどれもほとんど同じような形と大きさをしている。その団栗が背競べをしても優劣は決め難いことから、どれもこれも平凡で、抜きん出たものがないたとえ。

二三〇．飛んで火に入る夏の虫
自分から進んで、災いや危険なことに飛び込むこと。

二三一．無い袖は振れぬ
実際にない物はどうしようもないということ。金銭的に援助をしたいができないといった場合によく使う。

二三二．泣いて馬謖を斬る
規律や秩序を守るためには、処罰などの面で私情をさしはさまないということ。

二三三．長い者には巻かれろ
手におえないほど長い物には、抵抗しても仕方がないから巻かれるままになっていたほうがいいということで、権力や勢力の大きい物に対してはおとなしく従ったほうが得策だという意味。

二三四．流れに棹（さお）さす
流れに乗って走る船に棹でさらに勢いをつける意味で、好都合なことが重なって物事が順調に運ぶたとえ。

二三五．泣き面に蜂（はち）
不幸や苦しみの上に、さらに悪いことが重なること。

二三六．泣く子と地頭（じとう）には勝てぬ
泣きわめく子供と横暴な地頭には勝てる見込みがないので、言うことを通してやる以外にないということ。権力のある者には従わざるを得ないということのたとえ。

二三七．鳴くまで待とう時鳥（ほととぎす）
好機が到来するまで辛抱強く待つということ。

二三八．情けが仇（あだ）
相手に対する好意、または同情心からしてやったことが、かえって悪い結果を招くこと。

二三九．情けは人の為（ため）ならず
人は情けをかけておけば、巡り巡って自分によい報いが返ってくるということ。

二四〇．七転（ななころ）び八起（やお）き
七回転んでも八回起きるということで、転んだままではいないという意味。そこから、何回失敗してもあきらめずにがんばるたとえ。

二四一．生兵法（なまびょうほう）は大怪我のもと
剣法をはじめとする武道を生かじりしていると、それに頼って大怪我をするということで、身についていない知識や技術によって事を行うと失敗するというたとえ。

二四二．ならぬ堪忍（かんにん）するが堪忍
これ以上は我慢ができないところをじっと我慢するのが、本当の意味の我慢だという意味。

二四三．憎まれっ子世に憚（はばか）る
世間から嫌われ、憎まれている者にかぎって世渡りが巧みで、幅を利かせているということ。

二四四・煮え湯を飲まされる
信用して気を許している者に、裏切られてひどい目にあう。

二四五・二階から目薬
二階から階下の人の目に目薬をさしてやることは、なかなかうまくいかないものである。このことから、思う様にいかなくてもどかしいたとえ。また、遠回りで直接きき目のないことのたとえ。

二四六・二兎（にと）を追う者は一兎（いっと）をも得ず
二羽の兎を同時に捕らえようとする人は、一羽も捕らえることができないということで、同時に二つの物事をしようとすれば、どちらもうまくいかないということのたとえ。

二四七・二の足を踏む
もう一歩踏み出すことをためらう意味で、物事をする決心がつかず、尻込みすることのたとえ。

二四八・二の句が継げぬ
次の言葉が出てこないという意味で、驚いたりあきれたりして何も言えなくなること。

二四九・二の矢がつげぬ
もう一度やる力がない。

二五〇・二枚舌を使う
まるで舌を二枚持っているかのように、一つの物事を二通りに言うということから、うそをつくたとえ。

二五一・人間到（いた）る処（ところ）青山（せいざん）あり
この広い世の中には、どこに行っても自分の骨を埋める場所くらいはある。だから、故郷にしがみついているのではなく、大志を抱いて雄飛せよという意味。

二五二・糠（ぬか）に釘
あたかも糠の中に釘を打つように手応えがなく、何の効き目もないことのたとえ。意見しても聞き流している場合などに使う。

二五三・盗人（ぬすびと）にも三分（さんぶ）の理
盗人が盗みを働くにも、それなりの理屈があるということ。どんなことでも、理屈がこじつけられるたとえ。

二五四．濡れ衣を着せられる
無実の罪を負わされること。

二五五．濡れ手に粟
苦労をしないで利益を得ること。

二五六．猫に鰹節
好物をそばに置いたのでは、油断ができないことのたとえ。間違いを起こしやすい状態。

二五七．猫に小判
貴重なものでも、価値のわからない者に与えては何の役にも立たないこと。

二五八．猫の額ほど
面積のせまい土地の形容。

二五九．寝耳に水
寝ている時に冷たい水が耳に入ったということで、思いがけない知らせや出来事にひどく驚くたとえ。

二六〇．年貢の納め時
時期がきて年貢を納めなければならないという意味で、積み重ねてきた悪事に対する処罰を受ける時がきたことのたとえ。

二六一．能ある鷹は爪を隠す
鋭い爪を持つ鷹は必要な時以外はいつも隠くしていることから、優れた才能や実力を持つ者はみだりにそれをひけらかしたりしないというたとえ。

二六二．喉元過ぎれば熱さを忘れる
熱い食物でも喉のあたりを過ぎれば、熱かったことなど忘れてしまう。そこから、苦しい経験も過ぎてしまえば忘れること、懲りたことでもすぐ忘れて繰り返すこと、人に助けてもらった恩を忘れることなどのたとえ。

二六三．暖簾に腕押し
手ごたえがなく、張り合いのないこと。

二六四．敗軍の将は兵を語らず
戦争に敗れた将軍はその戦いについてあれこれ言うべきでないし、兵法についての理論などを説く資格もないという意味。失敗した者は沈黙すべきだというたとえ。

二六五．背水の陣

背後に川などがあると後退できないので、軍勢は必死で戦う。同じように一歩も退けない覚悟で、全力を尽くして事に当たること。

二六六．馬鹿と鋏は使いよう

鋏は、使い方によって切れるように、馬鹿でも使い方によって役に立つ。人を使うには、上手下手の差が大きい。

二六七．馬鹿の一つ覚え

愚かな者は何か一つのことを覚えると、得意になってそのことばかり言う。そこからいつも同じことを言ったり、したりして発展性のない人を嘲笑することば。

二六八．謀は密なるを貴ぶ

計略は外部に漏れないように、しっかりと秘密を守ってこそ成功するということ。

二六九．馬脚を露す

隠していたことが明らかになり、本性がでる。

二七〇．箸にも棒にもかからぬ

どうにもこうにも手のほどこしようがなくて取り扱いに困ること。

二七一．鳩に豆鉄砲

突然のことに驚いて目を丸くし、頬を膨らますのをいう。きょとんとするさま。

二七二．歯に衣着せぬ

言葉を飾ったりせず、思ったことや言いたいことをずばりと遠慮なく言うこと。

二七三．腹八分目に医者要らず

暴飲暴食はもちろんいけないが、さらに満腹も避けたほうがよいという意味。満腹の一歩手前の八分目にしておれば胃に負担がかからず、健康が保てることになる。

二七四．腹も身の内

腹も自分の体の一部なのだから、暴飲暴食によって痛めつけず、いたわってやるべきだということ。

二七五．針の筵

まるで針を植えた筵に座らされているように、いたたまれない気持ちをいうことば。不面目なことをしでかして、自責の念に駆られながら人の前にいる状態のときなどに使う。

二七六．ひいきの引き倒し
ひいきをしすぎて、かえってその人を不利な目にあわせること。

二七七．日暮れて途遠し
日は暮れてしまったのに目的地までの道のりはまだかなりあるということで、やりたいことや仕事が沢山残っているたとえ。

二七八．庇を貸して母屋を取られる
軒先だけと思って貸したのに建物まで占拠されるということで、一部を貸したために全体を取られるたとえ。好意につけ込まれてひどい目にあうこと。

二七九．左団扇
左手で団扇を使いながら気楽に毎日を送るということで、生活の苦労がなく、のんきに暮すたとえ。

二八〇．一筋縄ではいかぬ
一本の縄では縛っておけず何本も必要ということから、一癖も二癖もある人物、あるいは面倒な物事のたとえ。

二八一．人の噂も七十五日
あることについて人が噂話をするのはせいぜい七十五日くらいのものだから、悪い噂を立てられても気にするなという意味。

二八二．人の口には戸は立てられぬ
他人の口を戸でふさぐことができないように、人々が勝手に流す噂話はどうすることもできないということ。

二八三．人の褌で相撲を取る
自分の褌は使わずに他人のを使って相撲を取るということから、他人の物や立場などを利用して、自分の目的を成し遂げるたとえ。

二八四．火のない所に煙は立たぬ
火があるからこそ煙が立つということから、どんな噂にもその原因となる事実があるはずだという意味。悪い噂の時によく使う。

二八五．百日の説法屁一つ
百日間もありがたい仏法を説いてきた僧が最期におならをしたためにぶちこわしになったということで、長い間の苦労がちょっとした失敗で無駄になるたとえ。

二八六．百聞は一見に如かず
幾度も繰り返し聞くよりも、一度でも実際に自分の目で見たほうが確実であること。

二八七．百里を行く者は九十里を半ばとす
何事も終わりに近づくと困難になるから、九分ぐらいのところを半分と考えて、最期まで気を緩めず努力せよということ。

二八八．氷山の一角
海面上に現われている氷山は全体のほんの一部にすぎず、水面下の部分のほうがはるかに大きい。そこから、社会的な現象や事件などが部分的に現われ、背後にはもっと大きい部分が隠されているというたとえ。

二八九．瓢箪から駒が出る
瓢箪の中から馬が飛びだすことで、思いもよらないことが起こるたとえ。さらに冗談で言ったことが事実になってしまうたとえ。

二九〇．貧者の一灯
寄進や寄付は金持ちの虚栄心による多額なものより、貧しい人の真心のこもった少額なもののほうが尊いということ。

二九一．貧すれば鈍する
貧しくなると生活に追われて、才知のあった人でもそれが発揮できなくなるということ。愚鈍になるだけではなく、さもしくなったり、道徳意識まで低下するという意味もある。

二九二．風前の灯火
風が吹きつけて、いまにも消えそうになっている灯火の意味で、非常な危険が差し迫っていることのたとえ。

二九三．笛吹けど踊らず
踊ってもらおうと思って笛を吹くのに応じる者がいないという意味で、すっかりおぜん立てをして行動を促しても乗ってこないことのたとえ。

二九四．覆水盆に返らず
夫婦は一度別れたら、二度と元には戻らない。一度してしまったことは、取り返しがつかない。

二九五．武士に二言はない
武士道は信義を重んじるので、一度口にした言葉を取り消したり変更したりしないということ。いったん約束したことを守るたとえとして使う。

二九六．武士は食わねど高楊枝（たかようじ）
貧しさのために食事が取れないようなことがあっても、気位を高く保ち食べたふりをして悠然と楊枝を使うという意味。苦しい状況にあっても慌てたり、弱味をさらけ出したりしないたとえ。

二九七．豚に真珠（しんじゅ）
値打ちのわからない者には、どんな宝物をやっても意味がないというたとえ。

二九八．刎頸（ふんけい）の交わり
相手のためであれば首を斬られたとしても悔いはないほどの深い友情に支えられた交際をいう。

二九九．下手（へた）の考え休むに似たり
よい思案の出るはずもない人が考えこむのはやすんでいるのと同じで、時間の無駄だということ。

三〇〇．坊主憎けりゃ袈裟（けさ）まで憎い
その人を大変憎むがあまり、その人に関係のある物すべてが憎いこと。

三〇一．臍（ほぞ）を噛む
自分の臍（へそ）は噛めないことから、後悔しても及ばないこと。また、どうしようもないと知りながら後悔すること。

三〇二．仏作って魂入れず
物事の最も大切な点をなおざりにすることのたとえ。

三〇三．仏の顔も三度
どんなおだやかでやさしい人でも、何度もひどいことをされれば怒り出すことのたとえ。

三〇四．骨折り損のくたびれ儲（もう）け
骨を折っただけ損をして、得たものは疲労だけだったという意味で、利益や効果をもたらさない無駄な苦労をすること。

三〇五．蒔（ま）かぬ種は生えぬ
何事も、原因があって結果が生じるものだから、何もしないで結果だけを期待しても得られないということ。

三〇六．枕を高くして眠る
安心してゆっくり眠る。まったく心配事のない状態をいう。

三〇七．負けるが勝
相手に勝ちを譲って、人と争わないのが、大きな目で見れば有利な結果になること。

三〇八．馬子（まご）にも衣装
馬の手綱を取る馬方のような者でも、着飾れば立派に見えるということ。衣装で人品が変わるというたとえ。

三〇九．待てば海路（かいろ）の日和（ひより）あり
じっと待っていれば航海によい天候になって船出することができる。今は状況が思わしくなくても、きっと順調にいく機会がめぐってくるのであせらずに待てばよいということ。

三一〇．眉（まゆ）に唾（つば）を付ける
信用できないので、だまされないように用心するたとえ。

三一一．丸い卵も切りようで四角
同じ内容でも話の仕方によって円満に受け取られることもあれば、険悪な状態になることもある。それを卵の切り方にたとえたことば。

三一二．満（まん）を持（じ）す
弓をいっぱいに引きしぼり、そのまま構えている様子で、用意が十分にできて行動に移る時期を待っているたとえ。物事が頂点にまで達して、持ちこたえていることもいう。

三一三．木之伊（ミイラ）取りが木之伊（ミイラ）になる
人を連れ戻しに行って連れ戻される立場になったり、説得しようとした者が説得されてしまうことのたとえ。

三一四．身から出た錆（さび）
自分が行った悪事の報いで苦しむこと。

三一五．水清ければ魚棲（うおす）まず
あまりに清廉すぎると、かえって人に親しまれなくなることのたとえ。

三一六．水と油
水と油は混じり合わないことから、気が合わずに打ちとけない間柄のたとえ。また、調和しないことのたとえ。

三一七．三つ子の魂（たましい）百まで
三歳のころに持っていた性質は百歳になっても持っているということで、持って生まれた性質は一生変わらないという意味。

三一八．実るほど頭が下がる稲穂（いなほ）かな
稲の穂は実が入れば入るほど穂先が垂れるが、そのように人も内容が充実した立派な人物ほど謙虚な態度を見せるものだというたとえ。

三一九．身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ
水におぼれかかったとき自分の体を捨てる気になって水にゆだねると、自然に体が浮く。同じように窮地に立たされた場合には、命を捨てる覚悟で事に当たれば打開できるものだということ。

三二〇．胸三寸に納める
言いたいことがあっても心の中にしまいこんで、それを顔色や言葉に出さないということ。

三二一．無用の長物（ちょうぶつ）
あったところで何の役にも立たず、むしろ邪魔にしかならないもののたとえ。

三二二．目明（めあ）き千人盲（めくら）千人
世の中には、物の分かる人もあれば、分からない人もある。

三二三．目から鼻に抜ける
賢くて、物事の判断などが素早いこと。頭の回転が早く、抜け目のないこと。

三二四．目糞鼻糞（めくそはなくそ）を笑う
目やにが自分の汚いことを棚に上げて鼻糞を汚いとあざ笑う意味で、自分が同じようなものだと気づかないで他人の悪口を言うたとえ。

三二五．盲蛇（めくらへび）に怖（お）じず
そのことの恐ろしさを知らない人は、向こう見ずなことを平気ですること。無知な者は、物怖じしないこと。

三二六．餅（もち）は餅屋
物事にはそれぞれの専門家がおり、素人よりずっとすぐれているものだ。

三二七．元の木阿弥（もくあみ）
一度はよくなったのに、再び悪い状態に戻ること。苦労や努力が無駄になること。

三二八．物いえば唇寒し秋の風
人の短所や自分の長所をあれこれ言うと、後悔して唇に秋風の冷たさを感じるという意味。転じて、余計なことを言えば災いを受けたり、対人関係がまずくなったりしがちだから口は慎めというたとえ。

三二九．桃栗三年柿八年
桃と栗とは、芽生えてから三年で実がなり、柿は八年もかかるということで、何事もそれ相応の年季を入れなければ成果を上げられない。

三三〇．門前の小僧習わぬ経を読む
寺の門前に住んでいる子供はいつも読経を聞いており、特にならわなくても自然に経が読めるようになる。環境の影響や、ふだん接している人の感化が大きいたとえ。

三三一．薬石効なし
さまざまな治療を行ってみたが、一向に効果がなく、病気の回復がはかばかしくないということ。

三三二．焼け石に水
焼けた熱い石に少しの水をかけたところで冷ますことができないように、援助や供給、努力がわずかで効果があがらないことのたとえ。

三三三．薮をつついて蛇を出す
つつく必要のない薮をつついたために蛇が出てきたということで、余計なことをして災いを招くたとえ。

三三四．病膏肓に入る
不治の病になること。病状が悪化し、治る見込がないこと。手のつけようがないほど、物事に熱中すること。

三三五．山高きが故に貴からず
山は高ければいいというものではないということ。人間の値打ちは外見の立派さにはないというたとえ。

三三六．有終の美
最後まで物事をやり遂げて、しかも立派に締めくくること。

三三七．横車を押す
車は前後に動くものだが、それをあえて横に押すということから、強引に無理な道理に合わないことを押し通すたとえ。

三三八・夜目、遠目、笠の内
夜の薄暗い光で見る時、遠くから見る時、かぶった笠で顔の一部が隠れている時には女性の容貌はよくわからず、却って実際より美しく感じるということ。

三三九・寄らば大樹の陰
雨宿りをするにも、暑い日射しを避けるにも、小さな木より大きな木のほうがよいということで、どうせ頼るなら勢力ある人にたよるべきだというたとえ。

三四〇・弱り目に祟り目
それでなくても困っているのに、さらに神仏の祟りまで受けるという意味で、不運の上に不運、災難の上に災難が重なること。

三四一・李下に冠を整さず
すももの木の下で手を上げると実を盗んでいるのではないかと疑われるので、冠が曲がっていても直さないという意味。人から疑われるような行動はするなという戒め。

三四二・両刃の剣
一方では大変役に立つが、別の面では大きな害を与える恐れのあるもののたとえ。

三四三・良薬口に苦し
忠言・忠告は聞きづらいものだが、身のためになる。

三四四・類は友を呼ぶ
性格や考え方、趣味などが共通している者同士は気が合うので、自然に寄り集まって仲間を作るという意味。

三四五・礼も過ぎれば無礼になる
あまり丁寧すぎるのも、かえって相手を侮辱する結果になる。

三四六・ローマは一日にして成らず
強大なローマ帝国も一日で建設されたものではなく、長い年月をかけた努力の結果であるということ。大事業は短期間で完成するものではないというたとえ。

三四七・禍を転じて福と為す
身に受けた災難に耐えるだけでなく、逆に積極的に利用して幸運に変えてしまうということ。

三四八．渡る世間に鬼は無い

世の中には鬼みたいに無情な人ばかりでなく、困った時に助けてくれるような情深い人もいるものだということ。

三四九．和(わ)して同(どう)ぜず

人と争わず仲良くするが、自分の意見をしっかり守っていてむやみに人に同調したりしないという意味。

三五〇．破(わ)れ鍋にとじ蓋(ぶた)

割れた鍋でもそれに似合う修繕した蓋があるという意味でどんな人にもふさわしい配偶者が見つかるというたとえ。また、条件が釣り合った組み合わせがよいという意味。